

「おぢいさんのランプ」

角田 隆俊*

孫が何気なく物置から出してきた古いランプからこの話は始まります。そのランプを見ておぢいさんとなった巳之助が語ります。貧しかった自分がランプで生計を立て家族をもてたこと、電気と電灯が普及する兆しがありこのままでは生計を維持できないとやけになって火事を起こそうとしたこと、火をつけようとしてマッチを使おうとしたが水にぬれて使えず、火打ち石を出したもののその不便さに愕然となり、「進歩」というものを止めてはいけないと気づいたこと。ランプに決別を告げるため深夜に大木にすべてのランプを掛け煌々と火を灯し石打って壊したこと。

「ごんぎつね」で有名な新美南吉が29歳で亡くなる1年前に書いたものです。

活性型ビタミンDに抵抗する二次性副甲状腺機能亢進症(SHPT)に対し、経皮的エタノール局所注入療法(PEIT)や副甲状腺摘出術(PTx)が行われてきました。私自身は骨痛やかゆみに苦しむ患者に何かできないかと、またPTx後再発例などを経験したことなどをbaseとしてこの疾病に興味をもち、治療に携わることになりました。現在は2008年のcalcimimeticsの登場でPEITはほとんど適応を失い、PTx症例も全国的に減少しています。治療法の進歩を見て「おぢいさんのランプみたいだな」と思いました。

新美南吉は何を言いたかったのでしょうか、最後に巳之助に言わせています。「わしの言いたいのはこうさ、日本がすすんで、自分の古いしょうばいがお役に立たなくなっ

* 東海大学医学部付属八王子病院腎内分泌代謝内科

たら、すっぱりそいつをすてるのだ。自分のしょうばいがはやっていた昔の方がよかったといたり、世の中のすすんだことをうらんだり、そんな意気地のねえことは決してしないということだ。

それでも PTx は必要な治療であり、適応のある治療です。最終的救済治療であり引き継がなければならないものです。すっぱり PTx をやめてほかのことに専念すると主張したいわけでもありません。PTx も進化します。2018 年 9 月 21, 22 日には「SHPT に対する PTx 研究会」を霞ヶ関の灘尾ホールで開催させていただきます。中国の現状や J-DAVID 試験の結果も含めて意義のある会にしたいと思っています。PTx に関して熱く語る時間を楽しみにしています。ただ、これまでやってきたことにとらわれずに何が今必要とされるかを考えなければならないと思うのです。いずれ、腎不全という病態、腎生検や腎代替療法も過去のものになる時が来ることでしょう。私の願うことは、後世の人たちにあの西暦 2000 年前後の腎不全患者に関わっていた医師たちは常にそのときできる最善のことは何かを考え、患者に真摯に向き合っていたと感じてもらいたい、ということです。

参考文献

- 1) 新美南吉 著：おぢいさんのランプ。2006，日本図書センター，東京